



八千代市郷土歴史研究会
 会長 村田一男
 事務局 八千代市勝田台 3-24-10 牧野方

お知らせ

平成 18 年度市民文化祭参加
「郷土史展」

11 月 18 日 (土) 午後 1 時～5 時
19 日 (日) 午前 9 時～午後 4 時

「大和田新田の姿と歴史」(仮テーマ)

於：勝田台文化プラザ 2 階 展示室

・設営準備は、18 日午前 9 時より会場にて

9 月 9 日 (土) 拡大役員会と例会
10:00～全日 八千代市立郷土博物館にて
 ・調査内容・展示作品・機関誌打ち合わせ
 「史談八千代」原稿締め切り
 ☆日程変更されました！

9 月 24 日 (日) 博物館事業協力②
 再発見八千代・吉橋大師と文化財探訪

10 月 8 日 (日) 例会
13:00～ 八千代市立郷土博物館にて
 ・機関誌校正 史談八千代 31 号校正
 ・郷土史展展示作品調整

10 月 29 日 (日) 例会
10:00～全日 八千代市立郷土博物館にて
 ・機関誌校正 史談八千代 31 号最終校正
 ・郷土史展展示作品制作

11 月 3 日 (祝) サポセン祭り
 10:00～17:00 フルルにて 市民へ本会を紹介

11 月 12 日 (日) 例会
10:00～全日 八千代市立郷土博物館にて
 ・郷土史展展示作品制作

報 告

5 月 7 日 (日) 5 月例会

13:00～ 八千代市立郷土博物館にて 22 名参加

- 1.大和田新田についての研究調査経過
 大和田新田にある明治期の個人顕彰碑（墓碑・筆子塚）について、銘文解説とその背景などの調査結果の発表がありました。
 ①「小柴宣雄之墓」について（畠山会員）
 ②「小林佐圓司先生之碑」と「小林秀次郎墓」について（佐久間会員）

2.「郷土史研通信」54 号の発行

6 月 10～11 日 見学学習会
那須野ヶ原開拓跡と
さくら市ミュージアムなど

6/10; 勝田台北口 7 時発 (バス)・さくら市ミュージアム・佐倉陣屋藩士の墓・勝山城趾・昼飯・黒磯・青木周蔵別荘・西那須野乃木温泉ホテル泊

6/11; 乃木神社・乃木別邸・那須野ヶ原博物館・那須疎水堰他見学・勝田台北口

6 月 10・11 日の那須野ヶ原研修旅行は楽しく終了しました。初日は予報外れの好天で、2 日目は少し雨に濡れましたがそれ程のこともなく、暑くないだけ快適な森林浴もある楽しい旅でした。

特に広い那須野原の扇状地地形と近代開拓史や文物をみっちり学ぶことができました。



青木周蔵別荘

7月9日(日)例会報告

市博物館にて、新入会員1名(学生)を含む27名が参加し、大和田新田研究に関する中間報告や聞き取り調査などの情報交換を行いました。

(1) 6月24日、大和田新田下区旧家の小林サヘイジ家、鈴木ジンベイ家訪問の報告(佐久間会員、蕨会員)⇒の段参照

(2) 「利田家文書」(54号3月「品川歴史館と大森の史跡」参照)から、道標寄進者の品川宿和國屋の存在を探る作業の報告=8点の史料のうち「旅人玉数高書上 明治四年未正月分」に「和國屋文七」が「旅籠屋」として出ている(富永会員)



(3) 墓碑と保受録から見る小柴宣雄の系譜について(畠山会員)

(4) 小林佐圓司周辺の人物について(佐久間会員)

(5) 大和田新田基礎史料として「善兵衛組」に関する文献(2月例会学習資料)を配布(会長)

(6) 市民活動サポートセンター運営委員の関和会員より、「サポセンまつり」参加、機関紙『わ』に記事掲載などの報告と提案

(7) その他事務連絡=9月10日の例会は9日に変更

以上 蕨・記

6月24日(土)

大和田新田旧家訪問(3)

佐久間弘文

大和田新田の旧家訪問、今回は善兵衛家、市東家訪問に続き「佐平次家」・「甚兵衛家」の両家訪問の機会を得ました。(村田会長・牧野事務局長・蕨総務広報担当・佐久間調査担当)

【佐平次家】ご当主小林勇氏の夫人、佐知子さんから下区の旧家配置、産土神社、女性たちの各種の講の様子を聞くことができました。「吉橋霊場」の第32番札所が下区の「大教院」に置かれています。移築前の八幡神社境内、現在の下区公会堂のあたりにお堂があった、との話を伺いました。この寺院の実体はいまだ明確ではありませんが今後の研究の手がかりになるでしょう。佐平次家の輩出した先人に「小林秀次郎」氏がいます。氏は地租改正作業に活躍し、大和田町会議員、下区長、大和田長助役などを歴任し、38歳の若さで没しました。氏の業績は萱田の八千代霊園脇、大和田新田共同墓地の碑文に見ることができます。

【甚兵衛家】突然の訪問にもかかわらず、ご当主鈴木薫明(しげとし)氏・君子夫妻から懇切な話を聞くことができました。甚兵衛家といえば小野昭さんが『たうん八千代』第76号の表紙を飾った美しい藁屋根の家で記憶も新らしかったのですが、現在は藁屋根の家が取り壊され新築に変わっていました。当地でも女性たちによって世代別に5つの講が引き継がれているようです。この詳細は蕨さんの7月例会資料「大和田新田下区の民俗」をご覧ください。

なお佐平次家では前出の「小林秀次郎」氏が、甚兵衛家では薫明氏の曾祖父「鈴木岩太郎氏」が、共に学業の先生である大和田新田の「小林佐圓司」の弟子として名を連ねています。お世話になった小林家、鈴木家の皆さんに深くお礼申し上げます。

7.9 例会報告資料(要旨)

大和田新田下区の民俗

蕨 由美

2006.6.24 小林恒氏(サヘイジ家)宅にて、佐知子さんからと、同日 鈴木薫明(しげとし)氏(ジンベイ家)宅にて、ご夫妻からの聞き取りによる。

下区は十数軒の旧家で構成される。下区と上区の境界は一本松といわれているが、必ずしも屋敷の場所で分けているのではなく、その境ははっきりしない。

産土神社は、八幡神社で、その境内に大教院というお堂があった。大和田新田の中に寺院はなく、菩提寺は、正覚院や円光院など家ごとにちがう。

八幡様での講は、「八日講」、オビシャなど。オビシャは1月15日、2月1日、2月8日と初午の4つがある。

庚申講は、今も7軒でヤドを持ち回りで行っている。当番が「オカケジ」(掛け軸)を持ってくるが、今はもう拝むことは略されている。会費は100円。今は手間をかけずに夜8時ごろから11時ごろまで酒宴を開く。

女の人の講は、子安講が世代別に5つある。

最年長だった「念仏講」は、10年前に解散し、その石碑が八幡様にある。現在の最高齢世代の講は「観音講」。その下は2つの「秩父講」。その下の50歳代はかつての子安講の「観和講」で、今は観光旅行が主。その下の子安講は形だけは残っているとのこと。

ジンベイ家の萱葺きの民家は数年前まで残っていた。ジンベイ家とその新宅で隣家のナカエモン家の間に今の都市計画道路が通った際は、家屋を曳いて移転したという。その際、道路敷地内に残されていた五右衛門風呂に入りに入ったという笑話がある。また屋敷内の玄関までのアプローチの敷石は、都電の敷石である。

ジンベイ家は今も薫明さんご夫婦が農業を続けられている。

八千代市“栗谷遺跡”関係
シンポジウムと講演会
聴講記

森山一徳

2006年7月1日と2日に亘って栗谷遺跡関連のシンポジウムと市民講演会が開かれると云い、実行委員長として、高名な大塚初重先生の名が記載されている。以前ここ栗谷遺跡に道一つ隔てた上谷遺跡を見学したことがあり、複合遺跡でかなりな数の住居跡が存在する貴重な遺跡と聞いていた。今その隣が〇〇式と呼ばれる程の遺跡だと言う事で出席させていただいた。

〇〇式といえば堀の内式とか加曾利式などそれぞれ或る年代が与えられ一つの技術なり、文化を以って他と比較の基準になるものと考えていた。最近この〇〇式と呼ばれる遺跡名が多くなっている様にも思えるのだが、予稿集の中で小倉淳一氏が「弥生後期の関東地方では各地に個性的な土器が分布する」と述べておられる。

峰村篤氏の体験タイム「附加条縄文を作ろう！」を面白く聞いた。撚紐を二重撚りにする、反撚りにする等、篋その他の小道具？等も使ったであろう種々文様が刻まれていく。関東各地の個性的違いは材質は別として形状、文様(デザイン)に集落が共同体としての独自性を持っていたと言う事であろう。そしてこれは他集落の存在を承知していたといえる。

「八千代は弥生文化の交差点」(田中裕氏)なる話は、東京湾から→花見川→新川→印旛沼の線があるとし、また環濠集落と方形周溝墓等が、現利根川を越えないとの事である。

北関東との文化の交流の広がり、古代の武蔵・毛国・蝦夷の存在を考え時代を遡らせると文化圏の大きさも想像できそうである。

栗谷遺跡について(宮澤久史氏)は縄文時代からのもので、特に弥生中期以降、大規模集落

で、奈良平安の時代は近接の上谷・向境・境堀遺跡と共に大集落をなしていたとのことである。

最近AMS-炭素年代法により、弥生時代も5百年程遡るが弥生中期から平安時代までおよそ千五百年、日本の古代集落の中でこれほど命脈を保ったところは稀ではないかと思える。文化の交差点としての役割を充分果たしたのではないかと。

ところで、集落について、弥生時代にあつては集落が舌状台地の先端部に、後期には台地の奥へと展開し、舌状台地のかなり奥まった地点に古墳前期の集落が展開しているとの話であるが、水田は灌漑技術の進歩につれて平地に下ってくるという話も聞いていたので、少々違和感もあつた。

ともあれ近隣を含めて大きな集落であつたという事は、次はこの地を統治した者の痕跡、その発見の可能性はどうであろうか、これからの研究を楽しみに待ちたい。

7/1-2 シンポジウム
「印旛沼周辺の弥生土器」
& 市民講演会を主催して
藤 由美

この度は上記の市民講演会とシンポジウムに、多くの会員にご来場いただき、また実行委員会へのご協力など、ありがとうございました。

一日目の講演会は、市民向けとはいえ、弥生文化に関して研究の最前線からの報告で、森山会員の聴講記のように、今後の研究発展への期待につながる充実した内容だったと思います。

二日目は、弥生土器について研究者向けのプログラムで、市民の方からは「前日から通して聞いたので理解できたが、難解だった」との感想もいただきました。

この二日目の午前のパネルディスカッションのテーマは、「臼井南式」設定をめぐる研究史の総括。臼井駅南側の開発に伴う発掘調査で出土した特徴あ

る弥生後期の土器に、熊野正也氏が「MUSEUM ちば」誌などで「臼井南式」を称したのが、昭和53年でした。

(その頃の熊野氏の論旨は、12年前の平成6年、八千代市での講演会聴講記として本紙第4号にも掲載しています)

同じ頃、茨城県の土器を研究していた鈴木正博氏も臼井南式を提唱。特徴的なのは、附加条縄文という非常に細かい手仕事で、縄文原体の差が地域差として現れることから、縄文原体からみた土器型式、及びその社会の復元に力を注いでいたそうです。

その後、印旛沼周辺は開発に伴う調査報告が相次ぎ、資料数も増え、今一度細かい分類と見直し(特に南関東系土器からの比較検討)がせまられていることが今課題となっています。

午後のシンポジウムは、高花氏が、臼井南式を臼井南・江原台遺跡出土資料に限定して用いるべきとし、宮澤氏が「栗谷式」と称してよいような栗谷遺跡の特徴ある土器群を紹介し、また、茨城・栃木・千葉市側からの研究者から、その差異を比較しつつ、印旛沼周辺の土器群の特徴とその動きを浮彫りにされました。

最後に大塚初重委員長のコメントがあり、「市民の考古学」の必要性とともに、土器の型式設定では、考古学の基礎的な作業として細かい議論が欠かせないこと、そして、前日の鉄の経路の報告などからわかる弥生時代の関東、そして八千代の地域的な重要性を強調され、今後の研究の発展を念願されて、2日間の討議を締めくくられました。

9月10日(日)

八千代栗谷遺跡研究会主催
市民講演会

13:30~16:30 会費無料
於: 郷土博物館学習室

・「関東地方の弥生後期土器」
・「栗谷遺跡の弥生のお墓」
のお話です。

市立博物館企画展講演会
「習志野原」～明治天皇から
終戦まで～に参加して
酒井正男

郷土博物館企画展「習志野原」は、この原野にまつわる変遷などを紹介している。(現在公開中)

この記念講演会は、7月23日(日)で、滝口昭二氏(船橋地名研究会会長・本会会員)を招いて、同じ演題で話された。当日は梅雨の合間となり129名の参加者を迎えて盛大に催された。

「習志野原」のいまは、船橋市・八千代市及び習志野市の3市の行政により管轄されている。八千代市の一部は「陸上自衛隊習志野駐屯地の演習場」として原野が残っているなど、レジュメに沿って説明が進められた。

「大和田原」の表記には諸説あるが明治6年4月29日に明治天皇が「大和田ノ原」に行幸したとの表記がある。江戸時代には小金五牧の一つ下野牧から「小金原」、他に「四十里原」「正伯原」などの呼び名も残っている。

「習志野原」の誕生は、明治6年5月29日の行幸の折「大和田ノ原ヲ習志野原ト称シ操練場ニ定メラレ」という記録がある。

「習志野」の名称の由来の一つに、自動車の習(ナラ)し運転の「ならし」から、二つめに「奈良」の地名の如く平らな土地を指すこと、三つめに明治天皇が近衛兵の演習をご覧の際、指揮官の篠原少将の活躍がめざましく「篠原に習うように」の言葉から「ナラウシノハラ」→「ナラシノハラ」になったと諸説ある。今は「篠原に習え」が一般的とか。

「習志野原」の俘虜収容所について、明治38年3月25日のロシア軍俘虜収容所は「習志野里俗三軒家の松林中に在り」との記録がある。(ここに出てくる三軒家は「西野三軒家」と呼ばれた稲垣勘右衛門、飯生長右

衛門、竹林七兵衛各氏で、仲東＝現八千代台南3丁目に明治36年演習場拡大用地として買収されたため転住し、現在も居住している。)

その他にもドイツ軍捕虜収容所、高津廠舎など演習場諸施設とその配置など地域との係わりを含め、説明を続けられた。

江戸時代は幕府の小金五牧の一つ下野牧だった「習志野原」は明治以降、大正、昭和初期まで軍隊の演習場として利用された背景や終戦後の農場としての開拓を経て、その後の宅地造成による住宅地への変遷について、それぞれの地図を用い対比させての詳細な解説があり、非常に興味深い講演であった。

自衛隊・空挺館について
牧野光男

自衛隊習志野駐屯地内にある空挺館を知っていますか。駐屯地の東側の道に面して建物の正面があり、門までありますが固く閉鎖されている。建物の外観だけは通りから眺められる。この度機会があって内部を拝観する事が出来ました。

銃を持った衛兵のいる正門をはいると左前方に通路が延びていて、その先に空挺館がある。駐屯地内のほかの建物と趣の違った建物である。建物の横に説明板があり、それに依るとこの建物は「旧御馬見所」という皇室ゆかりの物である。



空挺館(旧御馬見所)

「明治44年(1911)に東京目黒の騎兵学校内に建てられ、明治天皇が修業式に行幸され、学生の馬術を天覧された由緒ある建物である。大正5年(1916)騎兵学校がここ習志野に移転した際、同時に移築され迎賓館として使用されていた。

昭和37年(1962)に空挺館と命名し、空挺精神の伝統継承と旧陸海軍及び自衛隊の空挺資料並びに騎兵資料等の展示館として現在に至っております」と説明されている。



同内部御立所

中に入ると、1階が各種の資料室になり、殉職者の遺影も飾ってある部屋もある。2階の東側に面した一段高く張り出したところが御立ち所となっている。

ここから練兵場(現在は住宅地)に続く演習場での演習をご覧になられたという。その脇に明治天皇の行幸の画があり、明治6年(1873)4月29日となっている。画の右手に白馬にまたがる天皇と砂塵を巻き上げ疾駆する騎兵隊の様をご覧になっている。これは大和田原の初めての演習に行幸された日であり、これを機に習志野と命名された記念すべきものである。

隣接する小部屋には演習に参加されたかつての宮様も宿泊されたという。建物の近くには「軍馬慰霊の碑」などの石碑が立っている。これはむかし騎兵学校であった事につながるもの。機会があれば見学する価値はあると思います。

〈追記 この空挺館については現在、市立郷土博物館で9月17日まで開催中の企画展「習志野原」で展示されています)

7月16日(日)
藤本涼輔会員が
「二十四孝」の講演
佐久間 弘文

大網白里町郷土史研究会の例会に当研究会員の藤本涼輔さんが招かれ、「二十四孝について」と題して1時間半に亘る講演が行われました。参加者は30名、地元会員の熱心な聴講、質疑が行われ、当研究会からも平塚・佐藤・佐久間の3名が同席し講演を支援しました。

藤本会員は国学院大学の1年生で東洋史学に深い興味をもって勉強中で、二十四孝をテーマに小中生のときから取り組んでいました。

今回の講演は昨年12月に八千代市郷土博物館で行われた千葉県郷土史研究連絡協議会(郷土研)の研究発表会で行った同会員の発表を聞いた大網白里町郷土史研究会からの要請によって行われましたが、本講演では特に大網白里町稲生神社に納額されている二十四孝の絵馬についても調査の結果が報告され、地元会員から大きな拍手を受けました。

この絵馬は県内唯一の二十四孝絵馬で、「郭巨」を題材としたものですが、極めて貴重な文化財として注目されています。

【補足】

郭巨(かくきょ)：郭巨の家はとても貧しく母、妻、子の4人暮らし。郭巨の母は孫を可愛がり自分の少ない食事を分け与えていた。

これを見ていた郭巨は、「子供はまた授かるだろうが、母親は二度と授からない。この子を埋めて母を養おう」と決意し子を埋める穴を掘ったところ黄金の釜が出てきた。一家はこの釜をいただき、子を埋めることなく母に孝養をつくした。

このように、中国の儒教の思想が端的に現れる寓話として、各地の二十四孝彫刻の題材に多数の例が見られる。

展示された「屠竜」の部品
牧野光男

『史談八千代』24号の拙稿「八千代の歴史散歩道8」の中で、神久保の水田に昭和20年1月27日、日本の戦闘機「屠竜」がB29と交戦墜落し、平成8年9月19日に発掘された事を書きました。

平成17年度鎌ヶ谷市郷土資料館企画展「戦争の記録と記憶 in 鎌ヶ谷」と題した企画展がありました。その図録の中に「発掘された屠竜」として4点の写真が載っています。ぐしゃぐしゃになった部品・断片となった部品が悲しみを物語っています。

その解説には、例外的に市外の資料を扱う。として「平成8年9月に八千代市神久保で発掘された屠竜の部品断片である。

この屠竜は、昭和20年(1945)1月27日、船橋上空でB29に体当たり攻撃を行った小林雄一少尉・鯉渕夏夫准尉が乗っていたものであり、常陸教導飛行師団に所属し、水戸飛行場から飛来していたのであった。

飛行機の機種そして戦法といい、第53戦隊の戦いを彷彿とさせる。平成8年の発掘では、お二人の遺骨と遺品、そして屠竜の残骸が収容された。残骸の大半は、陸上自衛隊入間基地内の修武台記念館と靖国神社遊就館に納められ、展示されている。

この発掘に尽力され、残骸の一部を所蔵されていた鈴木正敏氏のご好意により、今回の企画展に展示することができたものである。」とあります。

夏になると戦争に関わる話題が多くなります。

佐倉の国立歴史民俗博物館でも「佐倉連隊と戦争の時代」という企画展が、9月3日まで行われています。

あらためて平和と戦争について考えてみては如何でしょうか。

平成の大合併を視る
佐藤二郎

1. 大合併による全国の市町村数の変遷

明治維新以降、地方自治体で大きな合併が3回実施された。

「明治の大合併」、「昭和の大合併」そして「平成の大合併」である。

この大合併による全国の市町村数の変遷は、明治21年の71,313町村から15,859市町村に、昭和28年の9,868市町村から3,975市町村に、平成11年の3,232市町村から1,820市町村へと明治21年から実に97.4%の町村の減少となっている。

千葉県の市町村数の変遷は、明治21年の2,457町村から平成18年の56市町村となり、全国より減少率が大きく98.5%となっている。

2. 平成の大合併による市町村

(1) 都道府県別の市町村数

合併により都道府県内の市町村数が20以下と少ない順に、富山県(15市町村・以下数のみ記す)、福井県・香川県(17)、大分県(18)そして石川県・鳥取県(19)の6県である。

一方、合併後も市町村数の多いのは6道県で、北海道(180)、長野県(81)、埼玉県(71)、福岡県(69)そして愛知県(64)である。この中間の20~40市町村数は東京都(39)や神奈川県(35)を含む26都県、41~60市町村数は茨城県(44)や千葉県(56)を含む9県などとなっている。

(2) 編入・合併に係わった市町村率

編入・合併にかかわって、成立した市町村数の比率を見ると、第1位は愛媛県で70市町村のうち67市町村で、実に95.7%と全県が合併にかかわった状況である。

次いで広島県(93.0%)で、80%以上の市町村に係わった県

は 11 県となっている。

一方、合併が少なかったのは大阪府 (4.5%)、次いで東京都 (5.0%)、神奈川県 (8.1%) となっており、千葉県は 80 市町村のうち 37 市町村で 46.3% となっている。

(3) 編入・合併した市町村数の多い市町

編入・合併した市町で、市町村数の最大の市は新潟市であり、4 市 6 町 5 村 (15 市町村) で形成された。次いで、上越市 (14) であり、10 市町村以上で形成された 7 市は、浜松市 (12)、今治市 (12)、長岡市 (10)、高山市 (10)、津市 (10)、栗原市 (宮城県・10) そして佐渡市 (新潟県・10) である。

千葉県は南房総市の 7 町が最も多い。

(4) 編入・合併による色々な市町村

編入・合併した市町村は全国で 565 市町村があり、このうち 290 市町村が新市町村名を採用している (その比率は 51.3%)。

1) 平仮名・片仮名の市町名

平成 13 年 3 月現在、13 市町村 (6 市 6 町 1 村) が平仮名・片仮名であった。合併後の平成 18 年 3 月現在は 46 市町 (27 市 19 町) となっている。

(1) 市 (27 市)

※1. むつ市 (青森県) 2. つがる市 (青森県) 3. にかほ市 (秋田県) ※4. いわき市 (福島県) ※5. つくば市 (茨城県) ※6. ひたちなか市 (茨城県) 7. つくばみらい市 (茨城県) 8. かすみがうら市 (茨城県) 9. さくら市 (栃木県) 10. みどり市 (群馬県) 11. さいたま市 (埼玉県) 12. ふじみ野市 (埼玉県) 13. いすみ市 (千葉県) ※14. あきる野市 (東京都) 15. かほく市 16. 一あわら市 (福井県) 17. 南アルプス市 (山梨県) 18. いなべ市 (三重県) 19. たつの市 (兵庫県) 20. 南あわじ市 (兵庫県) 21. さぬき市 (香川県) 22. 東

かがわ市 (香川県) 23. うきは市 (福岡県) ※24. えびの市 (宮崎県) 25. いちき串木野市 (鹿児島県) 26. 南さつま市 (鹿児島県) 27. うるま市 (鹿児島県) (2) 町 (19 町)

※1. えりも町 (北海道) ※2. ニコセ町 (北海道) 3. 新ひだか町 (北海道) 4. むかわ町 (北海道) 5. おいらせ町 (青森県) 6. みなかみ町 (群馬県) 7. ときがわ町 (埼玉県) 8. おおい町 (福井県) ※9. かつらぎ町 (和歌山県) ※10. すさみ町 (和歌山県) 11. みなべ町 (和歌山県) 12. つるぎ町 (徳島県) 13. 東みよし町 (徳島県) 14. まんのう町 (香川県) 15. いの町 (高知県) 16. みやこ町 (福岡県) 17. みやき町 (佐賀県) 18. あさぎり町 (熊本県) 19. さつま町 (鹿児島県)

・平成の大合併で消滅した平仮名・片仮名の町村は、マキノ町、びわ町 (以上滋賀県) とむつみ村 (山口県) の 3 町村です。

※印は平成 11 年 3 月現在の市町。

2) 文字数の多い市町名

平成 11 年 3 月現在、文字数の多い市町は「ひたちなか市」(茨城県)、「天城湯ヶ島町」(静岡県) の 5 文字の 2 市町であった。

平成 18 年 3 月現在、最大は 6 文字で「つくばみらい市」・「かすみがうら市」(茨城県)、「いちき串木野市」(鹿児島県) の 3 市である。

5 文字の市町は「ひたちなか市」、「南アルプス市」・「富士河口湖町」(山梨県)「山陽小野田市」(山口県) の 3 市 1 町である。

千葉県では 3 文字の「いすみ市」、「南房総市」、「横芝光町」である。

3) 「南」の文字がつく市町村名が最多

290 新市町村名で、東・西・南・北の文字が入る市町村が非常に多い。第 1 位:「南」=南房総市、南アルプス市など 24 市町村、第 3 位:「東」=東松島市、坂東市など 11 市町村、第 4 位:「北」

=北名古屋市、鬼北町など 10 市町村、第 5 位:「西」=西東京市、愛西市など 6 市町である。

第 2 位に入ったのが、「美」のつく小美玉市 (茨城県)、奄美市 (鹿児島県)、美里町 (宮城県・熊本県) などの 17 市町である。

4) 唯一越県合併した旧山口村
長野県の旧山口村が岐阜県中津川市に全国唯一の県境を超えて合併した。

馬籠宿は旧中仙道の宿場町で、文豪島崎藤村の生誕地である。「木曾路はすべて山の中である」で始まる『夜明け前』の舞台で知られ、江戸時代の面影を残す街並みは従来「信州の馬籠宿」として有名であった。

合併後は「美濃の馬籠宿」となり、若干の戸惑いがあるまちだが、中津川市は「馬籠宿を観光の目玉とし、馬籠宿、落合宿、中津川宿のつながりを作り、旧中仙道の枠組みによるまちづくり」に期待しているようである。

5) 県内の越郡合併した横芝光町

県内の 6 新市町のうちで、横芝光町が山武郡横芝町と匝瑳郡光町との唯一越郡合併となり、山武郡横芝光町となった。他の 5 市町はそれぞれ単一郡内町村合併である。

=会員消息=

・新入会員

田中巖 (八千代台東四丁目)
土橋三枝子 (富里市根木名)

・転居

増田俊幸 盛岡市へ

=編集後記=

・私事ですが、3 月末、家族に不幸があり、前 54 号は急遽、関和編集長に復帰、編集いただきました。感謝!

・本会の大和田新田研究とともに、習志野原や佐倉連隊を巡る近現代史研究、印旛沼周辺の考古資料を巡る会員の取り組みがいま盛んです。

By 藤

sawarabi-y@nifty.com